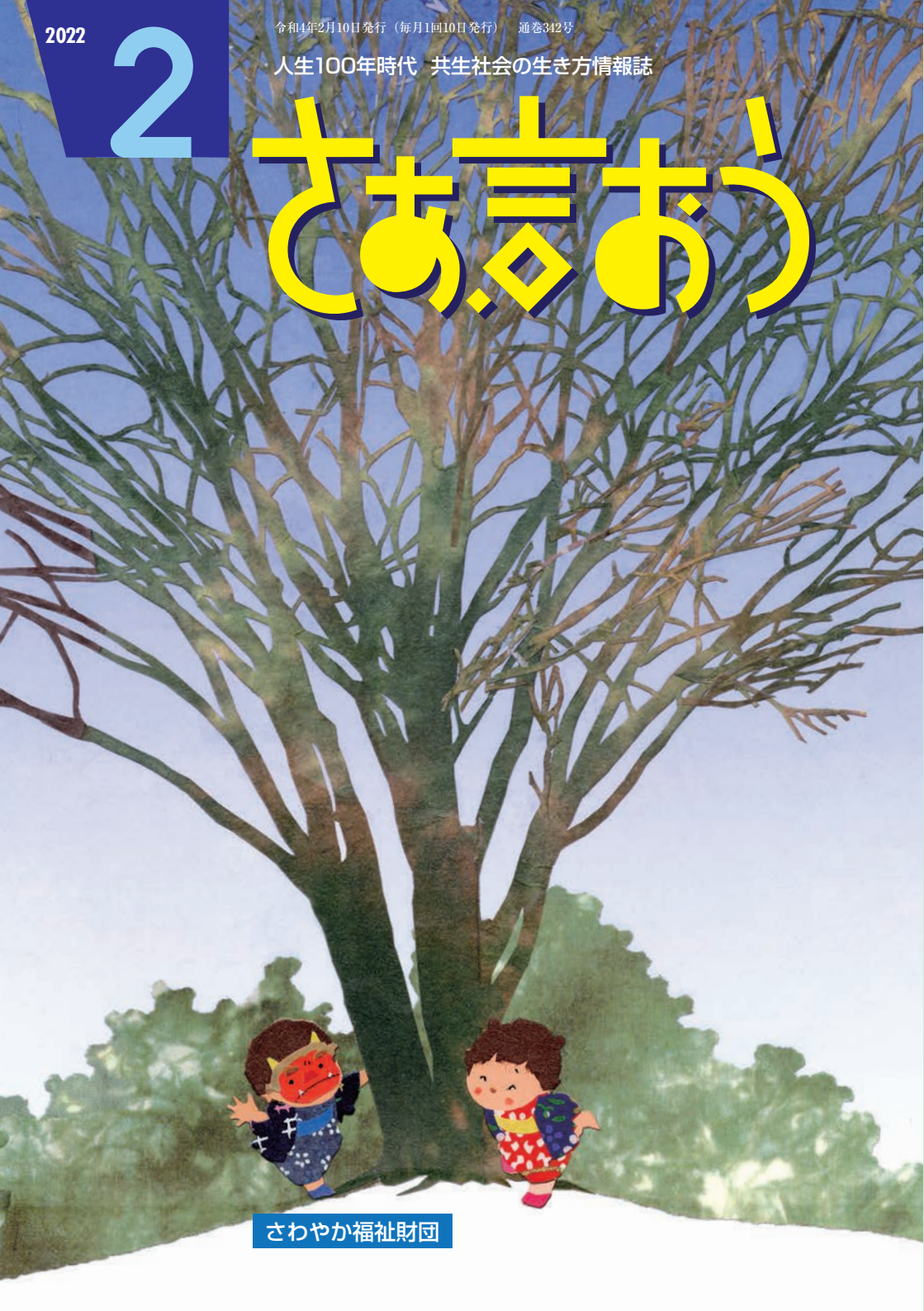
2022
2
令和4年2月10日発行（毎月1回10日発行）　通巻342号

人生100年時代　共生社会の生き方情報誌

さあ言おう



さわやか福祉財団

コロナ禍を乗り越えて共生社会へ

「地域助け合い基金」で

あなたの気持ちを助け合いの力に活かしませんか？

こんなふうに役立っています！
皆様のご寄付

子ども食堂がコロナ禍で配食

コロナ禍の影響を受けている家庭に夕食と休校中の昼食を配布し、新たな子ども食堂利用者やボランティア参加等の効果

神奈川県藤沢市

米・食材代、炊飯器購入、光熱費等を助成

東京都狛江市

福祉・教育関係者が居場所と支援を開始

ゆるやかにつながり、有用な支援につなげるため、近隣市民と協働で居場所を立ち上げ、生活支援も実施

立ち上げ期の賃借料とインターネット利用料を助成

有償ボランティア団体立ち上げ

中山間地の助け合いとして、移動支援や草取り等の有償の助け合い活動を立ち上げ

群馬県高崎市

立ち上げのための事務用品費・通信費を助成

ご支援、ご寄付を
どうぞよろしくお願いします。

夢・ふれあい社会

公益財団法人
さわやか福祉財団

財団ホームページ内
基金関連ページ

※詳細は、裏表紙をご参照ください。

人生100年時代 共生社会の生き方情報誌

さぁ、言おう

2022年2月号

CONTENTS

2 新しいふれあい社会 実現への道
助け合いの位置づけ
清水 肇子

4 広げよう つなげよう 地域助け合い 挑む！ 我らの地域づくり
一緒に〝新しい〟助け合い活動をつくる 住民と生活支援コーディネーター
大阪市東成区

9 広げよう つなげよう 地域助け合い 活動の現場から
思いを分かち合い 地域でできることは地域で
敷島台ささえ合いの会（山梨県甲斐市）

16「地域助け合い基金」助成先のご紹介／状況のご報告

20 連載 13 老いの暮らしを創る
出会う
福祉ジャーナリスト 村田 幸子

新しいふれあい社会づくりに向けて

● 新地域支援事業・助け合いの地域づくり
24 北から南から 各地の動き

● その他の財団の活動 など
31 ご支援ありがとうございます。
さわやかパートナー（賛助会員）・ご寄付者の皆様のご紹介

㉚『助け合い大全 ‘21』のご紹介
㉝みんなの広場 / 投稿募集
㉞さわやかパートナー・『さぁ、言おう』のご案内 / 表紙絵から

助け合いを広げよう！ 新・ひとりごと ● 清水 肇子

新しいふれあい社会　実現への道

助け合いの位置づけ

さわやか福祉財団　理事長　清水　肇子

コロナ禍によって社会が改めて大切さを認識した事柄は様々あるが、その代表的な一つが、「エッセンシャルワーク」だろう。

医療従事者や介護を現場で支えてくれている方をはじめ、地域のスーパーや商店から、運輸・物流を担ってくれる方などが携わる仕事で、そうした皆さんは、私たちの暮らしに欠くことができないものを日々与えてくれている。

特にコロナ禍では、医師や看護師、介護関係者の皆さんは自分の感染リスクと隣り合わせのぎりぎりの状況の中で仕事をしてくれている。責任感はもとより仕事意識を超えた相手への思いやりの気持ちが根底にあればこそだろう。

しかし一方で、残念ながら感染者やそうした職業に就く人々に対して、不当な偏見や差別、誹謗中傷が深刻というから驚きだ。心が折れて離職にもつながり、そうした親を持つ子どもが学校で仲間はずれにされる例も起きている。コロナ禍は孤立・孤独を生んだが、それだけではなく、これまで地域に埋もれていた社会の冷たい深層をもあぶりだした。それはどう解決して

いけばいいのだろうか。

助け合いとは、誰かの困った状態に自ら手を差し伸べることであり、さらにいえば、お互い同士、相手が今よりもっと良い状態になるよう願い、できることで支援し合うことだ。コロナ禍でも助け合いの活動は、形を変えながらできる支援で続けられている例は多く、それはまさに相手への共感があるからだ。ならば、こうした助け合い活動を身近にもっと広げていくことで、偏見や差別、中傷などが生まれる土壌自体を変えていくことができるのではないだろうか。

ここのところ、自分の気持ちを人を傷つけることでしか抑えられない事件が頻発している。助け合い活動は担い手不足の解消のために広げるものではない。これからの社会では、もっと本質的な意味を持つはずだ。人同士のふれあいを基本に置く助け合いは、エッセンシャル＝必要不可欠でまさに本質的なもの。そう社会の中で再認識し、多様な他者とふれあう経験を重ねていくことで、皆が心の枠を広げ、その傷を和らげ、そして寄り添えるようになっていきたい。

心は、相手を思い合うことで成長し、より豊かになる。ノーベル文学賞作家のカズオ・イシグロ氏は、受賞第1作の小説テーマにＡＩと子どもを選んだ。その話題作『クララとお日さま』は、ＡＩロボットの主人公が裕福な家の少女の「人工親友」として買われて、共に過ごす中での交流を描く。人にとって何が本当に大切か、生き方、心の持ち方、無垢の思いやりとは何かを染み入るように問いかけてくる。格差や差別や学力の遺伝子操作などへの批判をさりげなく散りばめながら。

ＡＩが進む社会を本当の意味で豊かにするためにこそ、人同士がふれあい、やさしさが育まれていく環境の大切さを忘れずに、しっかりと創っていく必要があるだろう。

一緒に〝新しい〟助け合い活動をつくる 住民と生活支援コーディネーター

大阪市東成区

下町の風情を感じさせる大阪市東成区。人口約8万人、世帯数約4万のこのまちも、近年、地区によっては町会未加入世帯が増え、〝地縁の外側〟にいる住民が多くなりました。その東成区で、生活支援体制整備事業開始から第1層生活支援コーディネーター（SC）を務める島岡繁希さん（29歳）と住民の新しい助け合い活動創出を取材しました。

（取材・文／塩瀬　潔泉）

会員同士のつながりが活動を支える 有償の助け合い「きづくちゃん」

2015年、東成区で、生活支援を行う有償の助け合い「きづくちゃん『たすけ愛』活動の会」が発足した。入会費1000円で、謝礼金は30分350円。事務局を区社協が担い、家事援助や外出付き添い等を行っている。現在、活動会員約50名、利用会員約200名、両方会員は25名ほど。これまでに3000件以上の助け合いが行われてきた。

きづくちゃん立ち上げ前、東成区では区社協のボランティアセンターへの相談・依頼が減っていた。困りごとが減った、ということなのか？

「社協職員が地域で住民さんに聞いてみると、そうではなく我慢して生活していることがわかりました。それならもっと使いやすい仕組みで、活動者に

ＳＣの島岡さん（右）と、
「きづくちゃん」事務局の松原朱里さん

も生き生きと活動してもらおう、ということになり、きづくちゃんをつくっていきました」と島岡さん。

助け合いの関係を超えて

島岡さんと活動会員の升井豊さん（74歳）と一緒に、区内のマンションに住む利用会員、中西徳三郎さん（89歳）を訪問した。ご本人は体調が思わしくなく奥の部屋で横になっていたが、玄関には、取材が来るということでスリッパを数人分出してくださっていた。升井さんが定期的に訪問しているのは2軒で、そのうちの1軒が中西さんだ。要介護1で、食事作りなどは介護保険サービスを利用している。

「私が来る前に、ご本人が細かいホコリを掃き出して、あちこちに集めておいてくださるんです。しんどいかもしれないけれど、全く動かないよりご本人にとってもいいのではと思い、ありがたくやっていただいています」と升井さん。

6年ほど前、仏壇の移動の手伝いから始まって、中西さん宅へ週1回の掃除に行くようになり、あるとき中西さんの奥さんから「健康のために一緒に散歩に行ってくれる人を探している」と相談を受けた升井さんが「私じゃだめですか？」と聞くと、「それなら来週からお願いします」ということになった。しかし数日後、中西さんが外出から帰ると奥さんは自宅で倒れており、救急搬送された。升井さんとの散歩は

部屋に掃除機をかけ、風呂場の掃除をする升井さん

掃除を終えた升井さん（右）と、起きてきた中西さんは雑談しながら来週の訪問予定などについて話していた

実現することなく、奥さんは1年1か月後、意識が戻らないまま亡くなったそうだ。「今日は目を覚ますかも」と毎日病院に通う中西さんの元に升井さんは週1回通い続け、話を聞いてきた。

最近では、奈良県にある中西家の墓じまいの相談にも乗ったという。

中西さんは持病もあり、体調にも波があることからいつ倒れるかわからないという不安が強いようだった。その意味でも、升井さんの訪問は支えになっている様子。「助ける・助けられる」を超え、お二人の間には「友情」や「信頼」のような関係性を感じた。

◇きづくちゃん活動会員の話◇

■黒田かよ子さん（72歳）

4年前からきづくちゃんの活動に参加している黒田さんは、広島県に生まれ、高校進学時に大阪へ。それ以来、東成区の住民だ。結婚して2人の子どもを育てながら、地区のママさんソフトボールなどを通じて区内には友人がたくさんいる。

「人が好きなので、訪問したお宅でのふれあいが楽しいです。足を痛めてきづくちゃんの活動を休んでいたとき、利用会員さんと偶然外でお会いして、『大丈夫？　また来てほしい』と言ってもらえたときは本当にうれしかった」と笑顔で語ってくれた。

■大宅伸彦さん（67歳）

中西さん宅の取材から区社協事務所に戻る途中、島岡さんが「あれっ、こんにちは」と声をかけたのが、犬の散歩をしていた大宅さんだ。このとき散歩させていたのはきづくちゃんとは関係なく、懇意にしている家族の愛犬だそうだ。急きょ取材に加わってくれた大宅さんは、大阪市中央区出身だが就職して以降ずっと東京で働いてきた。退職して大阪に戻り東成区に住むようになって、4年前からきづくちゃんで活動し、この1年ほど週1回、買い物支援に行っている一人暮らしの70代の男性からは、お総菜選びを任されている。ご本人の好みや栄養バランス等を考えて買おうとすると、1軒の店で買

前列左から、松原さん、松本さん、黒田さん。
後列左から、島岡さん、升井さん、大宅さん

い物が終わらない、と笑う。

「東京などの大都市ほど人とのつながりがなくなっています。でも、将来自分も助けてもらわなければならない場面が必ず出てくる。それなら、今できることはしたいですし、そういう輪が広がってほしい」と熱心に話してくれた。

■松本律子さん

松本さんは、昨年から仕事の傍らきづくちゃんで活動している。いろいろと大変なことが続き希望をなくしていた時期に、知人から「人のために何かしてみては？」とアドバイスを受け、親戚の子どもに手作りのお菓子を贈ったところとても喜んでくれたことに、自分が救われた。「自分も誰かの役に立てるのかもしれない」とインターネットで検索してみたら、偶然、地元・東成区のきづくちゃんに行き当たったそうだ。

「きづくちゃんの活動で出会う方々とお話しする中で、お一人お一人の歴史や大事にしていることを聞けるのは、その方と出会えたからこそ。短い時間だけれど幸せを感じます」と、やりがいを語ってくれた。

活動会員同士も支え合う仲間

活動会員の皆さんは、2か月に1回の集いで、活動の悩みもうれしかったことも共有している。自発的にプレート作成や動画制作、いろいろな集まりの場でのチラシ配布などできづくちゃんの活動をPRしてくれるので、島岡さんは動画制作を手伝ったり「今度、こんな集まりがありますよ」と情報提供したりしてサポートするそうだ。

「プレートを作っていらっしゃるときも、『これ、効果あるんかな…』とちょっと思ったりしましたが（笑）、皆さん自転車のカゴやバッグに付けてお知り合いを誘ってくださって、楽しそうです」（島岡さん）

コロナ禍では、きづくちゃんの活動がなくなったことによって精神的に落ち込んでしまった活動会員を別の会員が励ましに行き、元通り元気に活動できるようになったということもあった。

島岡さんは、

「私の声かけではなく、これまでの活動会員同士の交流があったから、その会員さんも元気になってくれたのだと思います」と語る。

きづくちゃんの会員は、既存の地域活動に参加していなかった人が多いという。町会未加入など、昔からの地縁に何となく入りにくさを感じて、その外側にいた人でも、謝礼金というわかりやすさや、「こんなことでもいいん

だ」という気軽な活動なのがいいのかもしれない、と島岡さんは感じている。立ち上げ時の狙いは成功していると言えそうだ。

やりたいことをワイワイ話し合える場「ワーキング」の取り組み

同区の第1層協議体には、専門職や役職者が入って行われる報告会と別に、「支え合いづくり推進協議体（通称・ワーキング）」がある。

島岡さんは、「住民さんが集まって、やりたいことをワイワイ話し合える場をつくりたかった」と話す。地域にはそれぞれ長年行ってきた地域活動があるが、それとは違うことをしてみたいと思っている住民もいる。それなら、協議体という制度を利用して話し合いの場をつくれないかと考えたという。

始めるにあたっては、体操教室参加者やきづくちゃんの活動者に参加を呼びかけた。体操教室修了者たちは、仲間同士の「歩こう会」に閉じこもりがちな人を誘うなどしていた。きづくちゃんは、活動会員の集いで「今度、ワーキングというのを始めますが、来てもらえますか」と呼びかけると、「行くに決まってるやん！　私、そういうのが必要やと思うからこの会にも来てんねんで」という返事が返ってきた。

事業開始以降、専門職や関係先、住民などさまざまな方面に働きかけ、「これでいいのか?」と悩みながら進んできたSCの島岡さんにとって、賛同して一緒に行動してくれる住民の存在はこの上ない力となっているようだ。

ワーキングはおおむね2か月に1回、区全体から20人程度の住民が集まり、買い物支援・男性の居場所・見守りの充実、の3チームに分かれてやりたいと思うことを自由に話し合ってきた。

「〝チーム〟としてやりたかったから、楽しくしたかった」と島岡さんが言う通り、制度等の堅い話はなるべくせずアイスブレークを多く入れ、みんなで食事に行ったり、当財団が開催した大阪サミットにもワーキングのメンバー10数人で勉強に行った。

「気運が高まっていたので、コロナ禍でワーキングが休止しているのはとても残念。早くまたやりたいです」と島岡さん自身、うずうずしている様子だ。

＊　＊　＊

「やらなあかん、と考えるとしんどくなる。でも、区民さんにとって良いほうに制度を読み替えて、やってみようやないか」という区社協事務局長の石川洋志さんのバックアップは、職員を勇気づけ、結束を強めていると島岡さんはうれしそうに話していた。ワーキングもそんな発想から生まれたものだ。

東成区には、従来の地縁の外にいた人たちが参加したくなる、自由で楽しい取り組みの工夫がある。地域の〝新しい〟助け合いづくりは、こうしたところから生まれるのではないだろうか。

思いを分かち合い 地域でできることは地域で

敷島台ささえ合いの会（山梨県甲斐市）

待ったなしの高齢化が進む地域で、市が主催する地域フォーラムとその後の勉強会への参加をきっかけに、みんなで地域にどんな支え合いが必要かを話し合い、活動の創出につなげた「敷島台ささえ合いの会」。自分の得意を生かしながら、和気あいあいと無理なく楽しく助け合う取り組みを紹介します。

（取材・文／城石 眞紀子）

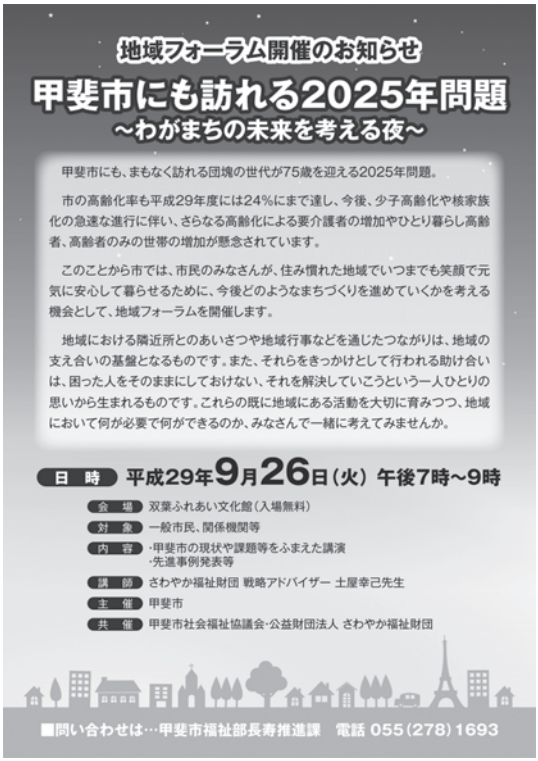
地域フォーラムへの参加が支え合い活動創出の契機に

山梨県甲斐市の北西部（旧敷島町）に位置し、ＪＲ中央本線竜王駅からは車で約10分。敷島総合公園の南側、標高約４００メートルの高台にある敷島台は、50年ほど前に分譲が開始された一戸建ての団地だ。７４５人が暮らし、そのうち65歳以上の高齢者は３５４人で、高齢化率48％（２０２１年10月現在）。同市内の他の地区の倍以上のスピードで高齢化が加速している。

同市では、17年度から生活支援体制整備事業をスタート。同年9月、今後

どのようなまちづくりを進めていくかを考える機会として、当財団も協力した地域フォーラムを開催。その参加者の中から、学びを深めたいという人たちを対象に年内に勉強会（市民ワークショップ）を3回連続で開催。居住地域（小学校区）ごとに分かれてグループワークを実施した。さらに、そこから市内11小学校区ごとに地域における「ささえ合い推進会（第2層協議体）」を立ち上げて、住民主体の助け合い・支え合いの地域展開を図っている。

この一連の取り組みの中で、学んだことを地域に持ち帰り、いち早く活動の創出に結びつけたのが、敷島台自治会を母体とする「敷島台ささえ合いの会」だ。



若い人や仕事をしている人も参加しやすいように、平日の夜に開催された地域フォーラムには約400名が参加

「敷島台では、度重なる災害への備えから自主防災組織を自治会の中に立ち上げたのをきっかけに、みんなが地域のことを考えるようになりました。だから、地域フォーラム開催のお知らせをいただいたときも、『そうだよね、防災だけじゃなくて2025年問題も一緒に考えていかないと』ということで関心が高く、自治会からの呼びかけもあって10数名が参加。その後のワークショップにも5、6名が参加したかと思います。私自身は、他のボランティア活動を通して、2025年問題のことは以前から知っていましたが、頭の中ではわかっていても、実際に自分たちで行動を起こして地域で支え合いをしなければ、という思いにまでは至らなかったので、これが一つの契機と

なりました」と話すのは、代表を務める浅川晴美さん（76歳）。

自治会長であり、事務局を務める小野規克さん（71歳）も、「敷島台では待ったなしの高齢化が進んでいて、実際に困っている人もいる。そういう現状を見ていたので、自助・共助の助け合いが必要だろうという思いがあった」と言い、自治会の組長会議の場でもたびたび議題に上ったことから、支え合い立ち上げの機運が高まっていったという。

そして18年11月、「敷島台　地域のささえ合いを考える会」を自治会主催で開催。全戸にチラシを回覧し、「住みやすい敷島台にするためには、どんな支え合いが必要か、みんなで気軽に意見を出し合って話し合いましょう」と呼びかけ、さらに個々にも声をかけ合ったところ、24名が賛同。

さらに話し合いを前に進めるために、浅川さんや小野さんに加え、民生委員やケアマネジャーなど核になるメンバー7名で推進委員会を結成。立ち上げ準備委員会として、日常生活上の困りごとを解決するための活動の骨子づくりが始まった。

「話し合いの場には、行政や市社会福祉協議会の担当者も来てくれて、いろいろとアドバイスを受けながら進めることができたのは、我々としてはとても心強かったですね」（小野さん）

そうしてでき上がった骨子を、組長会議、楽寿会（老人クラブ）等で説明。理解を得たうえで、自治会活動の一つとして運営するために翌19年3月の自治会総会で承認を得て、4月から活動を開始した。

支援会員の最高齢は88歳。得意を生かして楽しく活動

地域の高齢者らの集いの場「いきいきサロン」やグラウンドゴルフ、自主防災組織のメンバーなどにも声かけしたところ、最終的には支援を行う登録会員は28名に。支援対象者の範囲は、自治会会員で原則75歳以上の一人暮らし、75歳以上のみ世帯、あるいは障がい者のみの世帯。支援を受ける際の利用者の負担金は1時間500円。運営費は自治会からの補助に加えて、この負担金が充てられている。

これまでの主な活動実績としては、買い物支援、剪定、草取り、網戸・障子の張り替え、資源ごみの回収、粗大ごみの搬出など。

「支える側のメンバーの年齢層は70代が中心で、28名中女性は11名。最高齢は88歳です。その方は障子張りの技術があるので、もっぱらそれを担当してくれています。その他の剪定や草取り、買い物支援などについては、本人の申し出に従ってグループ分けをして支援

担当表を作っていますが、〝できるときにできる人が〟ということで、臨機応変に交代してもらっています。また、老々支援なので会員相互の助け合いも大切だよねということで、21年度からは75歳未満でも会員であれば、支援が受けられるよう、会則を変更しました」（浅川さん）

活動の様子についても聞いてみた。庭木の剪定支援をしているグループ長の一瀬猛（いちのせ）さん（73歳）は、「これまで福祉に全く関心がなかったし、話を聞いた当初は助け合いなんてとても自分にはできない、と思っていたんです。脳梗塞をやって、体の左半身が思うように動かないというのもありましたから。でも、家でくすぶっているよりもそういう活動に参加したほうがいいかと、たまたま植木いじりが好きだったので登録したところ、どっぷりはまってしまいました（笑）。みんなでわいわいと作業していると、時間も忘れるくらいで。リハビリの一環になってますし、私は敷島台に越してきてまだ日が浅いんですが、知り合いもうんと増えました」とうれしそうに話す。

小野さんも「私自身は剪定については全くの素人ですが、一瀬さんのように詳しい人がいるから、教わりながらやるのも楽しい」と、和気あいあいと活動している様子が伝わってくる。

買い物支援は、近くの介護老人福祉施設「敷島

たすけあい活動の様子
（庭木の剪定、障子張り、買い物支援）

荘」が地域貢献として協力。ガソリン代の実費だけで車を提供してくれており、運転はささえ合いの会のメンバーが行っている。利用者からは、「タクシーと違って往復の車中でも世間話ができたり、買い物をしながら、カートを押す支援会員と『このお魚は味噌煮にするとおいしいのよ』などと料理談義に花を咲かせるのも楽しいとの声も聞かれています」（浅川さん）とのこと。

また活動開始から3年近くが経ち、会員登録はしていないものの、頼めば手伝ってくれる人も出てきたそう。

「電気屋さんをやっていた人が、エアコンやテレビの修理をしてくれたり、建築会社に勤めていた人がサッシの修繕業者を紹介してくれたり。この団地には、いろんな特技を持った人がたくさんいるので、そういう人たちがもっと活躍してくれるようなればと、願っています」（小野さん）

つながる機会を増やす居場所づくりにも着手

さらに昨年4月には、10年ほど前まで酒屋として使われていた空き店舗を格安で借り受け、活動の拠点をつくった。ここをベースとして、今後進めていきたいと考えているのが、居場所づくりだ。

「これまで、好きなときに自由に集まれる場所がなかったので、会員同士のつながりを深める居場所が欲しかったんです。今は、剪定などの活動をした後には、反省会を兼ねて休憩し、それをきっかけにみんなでわいわい話をしたり。障子張りや網戸張りの作業場としても活用していますし、2か月に1回の推進委員会の会合もここで開いています」（浅川さん）

山梨県の生協が設けている市民活動助成金制度を活用して、冷蔵庫を設置したり、備品などもそろえた。一人暮らしの高齢者などもいるので、引きこもりや孤立を防ぐためにも、会員の居場所からスタートして、コロナ

活動の拠点でもある居場所。「はまらいん」とは「おいでください」の意味

居場所は、支援後の休憩（右）や推進委員会の会合（左）でも使用

が収まった後は、いつ来てもいつ帰ってもいい、地域の茶飲み場のような場所に発展させていきたいとの展望もある。

「どういうふうに運営していくかはまだ模索中ですが、時には軽食も作って、みんなで一緒にごはんを食べるのもいいかなと。感染が少し落ち着いたのを見計らって、昨年11月には、試しに推進委員で手打ちそばをつくって食べる会も実施したんですよ」（浅川さん）

拠点はスペースが広く、2階もあるので、アイデア次第でいろいろな使い方ができそうだ。居場所づくりで地域のつながりを深めれば、困りごとなどの情報を把握しやすくなるといった相乗効果も期待できるだろう。

助けるだけでなく〝助けられ上手〟になれる地域へ

アットホームな雰囲気で、無理なく楽しく活動をしている様子がうかがわれたささえ合いの会。事業を推進し、立ち上げ当初から同会のサポートもしてきた甲斐市役所福祉部長寿推進課の古屋皓司（こうじ）さんは、「敷島台の皆さんを見ていると、地域の力はすごいなということにあらためて気づかされた」と話し、こう続けた。

「市が開催したワークショップでは、地域資源を生かそう。足りないことは何なのか。それをみんなで学んで、各地域に持ち帰って話し合いをしてくださいということをやりました。その中で、地域の関係性の希薄化が進んでいることもあり、どういうことで困っているかすら把握するのは難しいとの課題を挙げた地域もありました。でも敷島台は、40年、50年かけて自分たちで地域をつくってきたという基盤があるから、みんなで支え合おうという気持ちがとても強い。そして、こういう

支え合いが必要だよねと話し合って始めたからこそ、活動としてしっかりしたものになっているし、これまで続いてきているのだと思います」

今後の課題は、助けるだけではなく〝助けられ上手〟になる地域づくりをいかに進めていくかだという。

「利用者もほぼ固定ではないけれど、声かけをしてもなかなか手が挙がらない。実は移送支援として、片道だけの通院支援の募集をかけたのですが、一人の利用もありませんでした。だけど実際は、タクシーやバスで行っている人たちがいる。遠慮しているのか、それとも会の宣伝が不足しているのか。回覧だけではなかなか活動を理解してもらえないのであれば、直接訪問して説明するほうがいいのかとも考えています」（小野さん）

浅川さんも「お互いに年を取ってきているし、いずれはここで骨を埋めることになります。だから、お互いにできることをやりながら助け合っていきたい」と抱負を語る。

これからもつながりを深めて思いを分かち合い、さらに住みやすい地域づくりを目指していただきたい。

（左から順に）小野さん、一瀬さん、浅川さん、古屋さん

敷島台ささえ合いの会

敷島台エリアで活動する住民ボランティア組織。敷島台自治会を母体とし、敷島台住民の日常生活上の困りごとを解決する活動を行うことにより、住民が安心して暮らせる地域づくりを目的としている。主な支援内容は、①買い物支援、②粗大ごみ搬出、③大物家具の移動、④庭木の剪定、草取り等、⑤障子・網戸の張り替え、⑥その他日常生活の支援。利用者の負担金は、①は300円／旧敷島町内、②③は無料、④⑤は500円／１時間（支援者１人につき）。負担金は会の運営費に充てられ、支援者には年１回の慰労会が催されている。

●連絡先／〒400-0123　山梨県甲斐市島上条3163番地
甲斐市社会福祉協議会　地域サポート係
電話　055-277-1122

応援ありがとうございます！

「地域助け合い基金」助成先のご紹介

皆様のご寄付を原資に、コロナ禍での困りごと解決のための活動や、さまざまな世代・人々が参加する地域共生社会への取り組みを支援している「地域助け合い基金」。今月号は、地域におけるちょっとした困りごとを住民同士で工夫し、助け合っている3団体を紹介します。

なお、このほかの助成先団体の活動報告も財団ホームページに続々アップしていますので、思いが詰まった多彩な活動をぜひご覧ください。

群馬県高崎市

中山間地の外出支援立ち上げから生活支援までをカバーし住民同士支え合う

くらしくらぶ　～倉渕支え合いくらぶ～

助成金額　15万円

くらしくらぶのある高崎市倉渕町は中山間地域にあり、人口約3300人、高齢化率約45％とのこと。過疎化が進んで高齢者を支える活動が必要となっており、かねてから移動支援のニーズがありました。NPO団体が実施する福祉有償運送の会員として活動してきましたが、その仕組みが使えなくなったことをきっかけに、第1層生活支援コーディネーターとも連携して移動支援を含む住民同士の有償の助け合い活動について検討を重ね、2020年11月にくらしくらぶを設立。外出支援、草取り、家事、ペットの散歩・えさやり、裁縫・衣類の補修、電球交換等を活動内容としています。

本基金の助成金は、立ち上げに伴う複合機・衛生用品・事務用品等の購入、会議費、保険代、広報宣伝費その他に充てていただきました。

2021年3月現在、会員数32名、活動開始から189件の助け合いを実施。利用した住民から喜びの声が多数寄せられ、活動者の生きがいややりがい、自身の介護予防にもつながっているということです。独自に運転者講習会を実施するなど担い手も増やしており、今後もさまざまなニーズに柔軟に対応できるように努めたい、との報告をいただきました。

外出支援以外に、雨といの掃除などの依頼もある

京都府木津川市

リタイア後もスキルを生かして高齢者や障がい者の生活を支援

おたすけ隊西木津川台

助成金額　15万円

2016年に設立されたお助け隊西木津川台は、地域の高齢者や障がい者がいる家庭の困りごとに対し、ちょっとした生活支援を行うことで地域福祉の向上を図っています。また、児童公園の花壇整備なども行い、自治会や民生児童委員、地域住民とも連携して活動しているとのことです。

最近の困りごととして、庭木の剪定や除草、外溝の清掃や側

購入した高圧洗浄機を使用して行った、地元小学校の玄関前清掃の様子

溝・排水管のつまり等が増えており、それに対応するための資器材をそろえたいと、本基金に助成申し込みをいただき、高圧洗浄機、充電式のこぎり、脚部伸縮作業台、充電式ヘッジトリマー等を購入されました。これらを使用して高齢者世帯の除草、剪定作業や蛍光灯交換等を行ったとのことです。

「リタイアされた皆さんへ。今まで培った自身のスキルを活かし、地域に住まわれる高齢者（独居）の方々にチョットしたお助けをしてみませんか?」「〝ここに住んで良かったと思える地域づくり〟に取り組んでみませんか!」とのメッセージもいただきました。

静岡県袋井市

ちょっとした困りごとを住民同士で助け合う

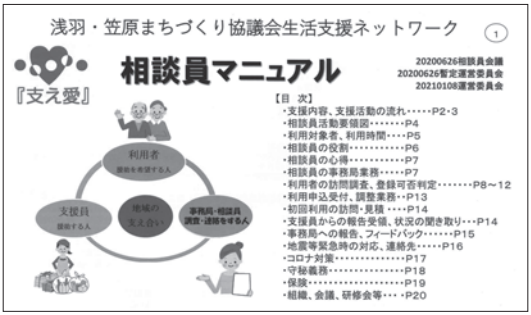
浅羽・笠原まちづくり協議会生活支援ネットワーク

助成金額　15万円

浅羽・笠原まちづくり協議会生活支援ネットワークは、一人暮らし高齢者の増加などから、地域住民の支え合いを実現しようと2020年4月に設立。掃除、庭の草取り、洗濯・布団干し、ごみ出し、買い物代行、病院等への付き添いなど、ちょっとした困りごとを、支援員ができる範囲でお手伝いしています。第2層生活支援コーディネーターには、準備段階から会議でアドバイスをもらうなどしてきたそうです。

本基金の助成金は、事務担当報酬、相談員および支援員向けマニュアル作成・印刷代、支援員研修資料コピー代等として、立ち上げを支援させていただきました。

「作成したマニュアルは、活動を行う相談員や支援員に不


浅羽・笠原まちづくり協議会生活支援ネットワーク　1

『支え愛』

相談員マニュアル

20200626相談員会議
20200626暫定運営委員会
20210108運営委員会

【目　次】

・支援内容、支援活動の流れ……P2・3
・相談員活動要領図……P4
・利用対象者、利用時間……P5
・相談員の役割……P6
・相談員の心得……P7
・相談員の事務局業務……P7
・利用者の訪問調査、登録可否判定……P8～12
・利用申込受付、調整業務‥P13
・初回利用の訪問・見積……P14
・支援員からの報告受領、状況の聞き取り…P14
・事務局への報告、フィードバック……P15
・地震等緊急時の対応、連絡先……P16
・コロナ対策……P17
・守秘義務……P18
・保険……P19
・組織、会議、研修会等……P20

支援活動の様子

可欠なもので、生活支援サービスの質向上に大きな成果を発揮している」とのことです。今後は、事業定着のために地域における知名度・必要度の向上、支援者・利用者を増やし活動を活性化、一定収入を確保し安定した運営、ニーズの多い移動支援について検討を重ね早期実現を目指す、とのことです。

「地域助け合い基金」状況のご報告

皆様のご支援により全国各地の助け合いを助成している「地域助け合い基金」。1月15日までの状況をご報告いたします。

（1月15日　当財団ホームページ開示時点）

◎寄付受付額
206件　3113万3336円
このほかに当財団より9千万円を供出

◎助成実行額
649件　1億808万897円

コロナ禍を乗り越え、地域共生社会を実現する活動のスタート・継続が促進されますよう、引き続き皆様のご支援・ご寄付をよろしくお願い申し上げます。

（事務局長・内田）

当財団ホームページでは毎日、寄付と助成金額を開示しており、助成可能な金額もご覧いただけます。寄付や助成をお考えの方は参考にしてください。

クレジットカード決済ページ

財団ホームページ内基金関連ページ

●基金に関する情報、およびクレジットカード決済は、QRコードもご利用ください！

基金に関するご意見・お問い合わせ

＜地域助け合い基金担当＞
電話：(03) 5470-7751　FAX：(03) 5470-7755
メール：tasukeai-kikin@sawayakazaidan.or.jp

連載 13

老いの暮らしを創る

出会う

福祉ジャーナリスト　村田　幸子

２０２１年の年越しを、奈良法隆寺門前のお宿で迎えました。「除夜の鐘が聞こえるかな」と楽しみにしていましたが、なんのなんの、紅白歌合戦を見ながらああだらこうだらケチをつけているうちに、気がついたら元旦でした。聞くところによると、法隆寺では通常、除夜の鐘はつかないとのこと。ただ1回だけ、世界遺産に登録された１９９３年には、記念についたということです。ともあれ、斑鳩の静謐な空気の中で迎えた新年は、いつにも増してありがたく、「新年おめでとう」の挨拶が心に沁みました。

ゆく秋の　大和の国の薬師寺の
塔の上なる一ひらの雲

歌人佐佐木信綱のこの歌と共に、薬師寺東塔を初めて目にしたのは、高校3年生の修学旅行の時です。歴史的建造物や

仏様などには何の関心もなかった頃の修学旅行では、行った先々で繰り返される説明等は聞き流すだけ。開放感に満ち満ちた友人たちとの旅が、ただ楽しくて仕方ありませんでした。特に私は「お寺では火の玉が出るよ」とか「幽霊もいるよ」などと脅かされていたことが頭に残っており、怖さが先立って、どちらかというとお寺は近づきたくない所でした。

そんな私が長じて今、仏様に強い関心を持ち、折りあるごとに様々なお寺を訪ね歩いています。中でも懐かしいのは、薬師寺の東塔。２００９年から全面解体修理が行われ、12年の歳月を経て昨年、一般公開されました。修復なった東塔は、高校3年生の時に目にした姿、そのままでした。

セーラー服を着た私たちの前でお坊さんが、この塔は3つの屋根の下に裳階（もこし）と呼ばれる飾り屋根がついており、一見六重の塔に見えるが、三重の塔なのですよと、塔や薬師寺の歴史をはじめ、仏様は様々な形をしており皆を救ってくれるのです等と、高校生の私たちにもよくわかるように説明してくれたのを、微かに覚えています。そのお坊さんは、後に薬師寺の管長になられた、若き日の高田好胤師でした。修学旅行生を相手に親しみやすくユーモアたっぷりに話してくれる好胤師のガイドは圧倒的な人気で、18年間、６００万人の修学旅行生たちに説明し続けたといいます。また失われていた伽藍の復興を願い、全国で写経運動を展開して見事に再建させたことはよく知られて

います。

好胤師の話を聞いて、私は初めて仏様を身近に感じました。お寺も怖い所ではなく、私たちの暮らしと共にあるのだということが朧げにわかり、どことなく懐かしい気がするようになりました。大阪放送局に勤務していた頃は、積極的に奈良や京都に出かけ、仏様をはじめ古き文化財を訪ね歩きました。年を重ねるに連れ、その楽しみは深まっています。

まだ自分の考えも生き方も定まっていなかった青春真っただ中の時に、仏とは、寺とは、ということを心に届く形で話してくれた高田好胤師との出会いが、今の私に大きな影響を与えていることを、実感しています。

人は、出会った人によってつくられる。

今の私は、これまで出会った人たちによってつくられました。2年にわたるコロナ禍で、人と出会う機会は圧倒的に少なくなり、またそれを良しとする意見も散見されます。しかし人との出会いは心の滋養になり、人を大きくします。時代がどう変化していこうとも、人と出会う機会をたくさんつくり、出会った人から何かを受け取れる自分の感性も、磨き続けていきたいと思います。

（むらた　さちこ） 立教大学英米文学科卒業後、NHKにアナウンサーとして入局。報道番組のリポーターや社会性のある硬派の番組を中心に担当。1990年、解説委員に就任。NHKスペシャル「あなたが寝たきりになった時」、NHKモーニングワイド「高齢化社会」のキャスター他、多くの番組を担当。2004年、解説委員を退任後も高齢者問題の第一人者として活躍中。

新しい
ふれあい社会づくりに
向けて

ふれあい　いきがい　助け合い

さわやか福祉財団は、子どもから高齢者まですべての人が、
それぞれの尊厳を尊重しながら、いきがいをもって、
ふれあい、助け合い、共生する地域社会づくりを一貫して進めています。
特に現在は、全国自治体が新地域支援事業で取り組んでいる
住民主体の助け合いの地域づくりを強力に支援しています。
どうぞ、皆様の地域の情報もお寄せください。

- **新地域支援事業・助け合いの地域づくり**
  北から南から　各地の動き
- **その他の財団の活動　など**
  ご支援ありがとうございます。
  さわやかパートナー（賛助会員）・ご寄付者の皆様のご紹介

北から南から

新地域支援事業・各地の動き

（2021年12月1日～31日）

●全国各地で、推進の支援をしています
●活動の一部を紹介しています

SC＝生活支援コーディネーター

住民に参加を呼びかける支援（住民対象のフォーラムや勉強会の支援等）

名古屋市（愛知県）

14日／名古屋市北区社会福祉協議会から依頼を受けて、「新しい居場所の形フォーラム in 北区　サロンスタッフ交流会」で当財団が講師を務めた。昨年1月開催の予定だったが、緊急事態宣言が出されたため延期となり、11か月ぶりに行われた。その間、サロン実践者をはじめ地域の活動もコロナの影響を受け、食事提供は中止、または集うことや話し合うことも自粛を余儀なくされ、縮小していた。そのような状況を受け、同区社協側が内容と開催方法を再検討。テーマは、「コロナ禍のサロン運営と共生型常設型居場所について」とし、コロナ禍での工夫にも触れながら、「いつでも誰でも型」の居場所の必要性を事例と共に伝える内容だった。開催は会場とオンラインでのハイブリッドとなり、財団もオンラインで参加した。参加者は、サロン活動者、支え合い事業関係者、地域福祉活動計画の関係者、地域包括支援センター関係者、新たに共生型常設型居場所を始めたいと考えている人、大学関係者など。

財団から、「コロナ禍のサロン運営と共生型常設型居場所について」として講演。「NEXT」動画でポイントや手法を簡単に伝え、共生型常設型居場所について説明した。地区の説明会や回覧を繰り返して必要性を伝え、理解者を広げながら「人・モノ・お金」を集めていった静岡県袋井市の「高南の居場所　あえるもん」の方法やその効果、また、新潟市の「実家の茶の間・紫竹」の居心地の良い運営のポイント等を具体的に伝えて、参加者に考えてもらった。最後に、居場所をつくることはこれからの共生社会づくりにつながることを共有した。活発な質疑応答で熱心さの伝わる交流会となった。「シンプルに、居心地の良い空間で、誰かとつながる居場所を社協としてもバックアップできるよう参考にしていきたい」とのことで、同区の今後の取り組みに期待したい。（鶴山）

SC研修・情報交換会等に協力

長野市（長野県）

1日／長野市では、住民自治協議会に

配置している地域福祉ワーカーが第2層SCを兼務している。今年度5回目となる今回の「地域福祉ワーカー連絡調整会議」は、長野市が主催して定期的に開催されているもの。当財団では合計3回協力する予定で、今回は7月開催の会議に続き2回目となる。協力する3回の会議の目的は「SCの役割と活動創出の取り組み方法の理解」で、3回の中心テーマを3*ステップに分けて実施していく計画。

今回はステップ②を中心にグループワークも含めた構成とした。事例の一つとして、神奈川サミットでも登壇いただいた同市大豆島地区担当の地域福祉ワーカー（第2層SC）平野歌織氏からも説明いただいた。

次回はステップ③をテーマに開催する予定。（髙橋）

大野市（福井県）

16日／大野市では、市と第1層・第2層SCによる「コーディネーター定例連絡会」が毎月開催されている。今回の連絡会は当財団も同席し、各SCからの報告に対してコメントしていった。同市は8圏域ある公民館区に第2層協議体を設置していく構想だが、現在は6圏域での設置となっており、設置時期や地域状況によって直面している課題も異なっている。定例連絡会によって全SCと市が協議体の課題と対応を共有することで、各地区での取り組み推進に生かしている。（髙橋）

長崎県

18日／長崎県のSCを対象に、当財団が有償ボランティア（生活支援）をテーマとする現場研修と情報交換を併せて開催した。開催の周知には同県に協力していただいた。県内21市町村中17市町村、約40名が参加。会場となった波佐見町は、財団も協力して4年前に住民フォーラムから2層づくりを行ったところ、関係者の予想以上に住民が助け合いの必要性を感じており、SCの支援もあって有償ボランティアが4つの自治会で立ち上がるなど広がり出している。

今回の現場研修では、同町で生活支援を行っている「井石たすけ愛たい」の取り組みと課題を代表の野下和幸氏と、支援した植垣章子SCが発表。柿本千江美SCは住民への伝え方として寸劇を披露した。

「どのようにリーダーを見つけるのか」「事務所はどうしているのか」など具体的な質問で有償ボランティアの仕組みとSCとしての支援について理解を深めた。

続く情報交換会では、各市町村での住民主体の助け合いの地域づくりの取り組みや課題を、3ステップの①～③とその他の4つに分けて書き出し、全体で共有。情報交換の形で解決していった。

今回あらためて、SCが情報を求めていること、座学だけでなく具体的な現場研修を求めていることが参加者の反応からもわかる研修となった。（鶴山）

＊3ステップ：ステップ①体制づくり、ステップ②ニーズの把握と担い手の掘り起こし、③活動創出

県レベル研修に協力

岐阜県

7～9日／岐阜県で昨年11月の第1部に続く県レベル研修が行われ、当財団が協力、SCを含む関係者が参加した。オンラインの環境で実施された本研修だが、意見交換の構成を取っており、参加者の発言の機会を増やす目的で、県内を5ブロックに分けて少人数化を図っている。

新任を対象にした基礎研修の位置付けの第1部に続き、今回第2部では実践編として新任と共に現任者を対象にした。当日は、財団から生活支援体制整備事業の進捗の目安として3つのステップを提示。それぞれの要点を整理した上で、現場の課題など参加者の意見を確認。その後、他の自治体の事例等を含めた情報提供と解説とともに、解決策など実践的な意見交換を行った。

同県では本研修とアドバイザー派遣事業が連動しており、県レベルのバックアップ体制として自治体の個別支援への展開が取られている。（長瀬）

県の支援

山梨県

2日／3月開催予定の山梨県庁主催のアドバイザー派遣報告会と情報交換会の開催について、県担当者、NPO法人全国移動サービスネットワーク（移動ネット）、当財団で、オンラインによる打ち合わせを行った。今年度の同県のアドバイザー派遣事業は、移動ネットによる移動支援創出以外に、当財団としては住民主体の体制づくりや生活支援、居場所などの創出支援を、手上げした7市町村に対して行ってきた。今後の研修では、7市町村からアドバイザー派遣を受けての気づきを中心に報告してもらい、全参加者での質疑応答を行うこと。また、聞きたいことなどを事前アンケートで取り、グループワークによる情報交換会を行う予定。（鶴山、三上）

地域包括支援センター対象の情報交換会に協力

吉川市（埼玉県）

15日／吉川市で「地域支え合い会議に関する情報交換会」が行われ、当財団が協力。参加者は、同市内の3包括の職員と行政担当者、埼玉県地域包括ケア課。包括が開催し、自治会単位の地域づくりを考える「地域支え合い会議（地域ケア会議）」を今後どのように進めたらよいか、との声を受け依頼があったもの。

各包括からの現状と課題の報告に対して、財団から取り組みにおける良い点と改善できると思われる点をアドバイスし全体で共有。質疑応答も活発に行われ、有意義な内容となった。

新たな第2層協議体の立ち上げや同会議との連携などの課題もあり、これからも包括・社協・行政による意見交換は継続していくとのことで、今後の動きに期待したい。（岡野）

地域づくり勉強会に協力

武蔵村山市（東京都）

7日／武蔵村山市の令和3年度助け合いづくり研修会に、当財団が講師として協力した。協議体メンバー17名と、第1層・第2層SCが参加。事前に受けた質問に関連する事例を紹介し、質疑応答を行う形で進めた。

質疑応答では、空き家を活用した居場所の事例、草刈り機を使った場合の保険のカバー範囲等について質問や意見交換が行われた。参加者の感想では、「出された質問そのものが参考になった。こうした意見交換や情報提供を続けてほしい」との声があった。

同市では、協議体向けに継続的に現場視察も行っている。コロナ禍ではあるが方法を検討し実施していきたいとのこと。今後、視察先や方法等についても財団から情報提供を行う。（岡野）

協議体の活動・編成等に協力

坂戸市（埼玉県）

2日／坂戸市第1層協議体がオンラインで開催され、当財団が講師として協力。参加者20名。同市では、第1層協議体のメンバーを第2層協議体代表者と第2層SCとする形で再構築しており、全体の意識統一のために生活支援体制整備事業についてあらためて基本的理解を深めるために、今回の協議体が開催された。

最初に、第1層SCから活動報告と今後の予定、第2層SCから協議体の活動報告が行われた。その後、当財団から講話を行った。聞きたい内容を事前にアンケートで聞き取り、事業の概要や、要望の多かった担い手確保等について先進事例を紹介しながら進めた。質疑応答では、「住民に自分事として考えてもらうには」「男性のサロン参加を促すには」等の質問に対しての参考事例も紹介した。地域で勉強会を行いたいとの話も出たため、勉強会で使えるツールとして、財団の「NEXT」動画や埼玉県制作のアニメーションを紹介した。（岡野）

美里町（埼玉県）

9日／美里町大沢地区の第2層協議体が開催され、当財団もオブザーバー参加した。同地区ではこれまで買い物支援を中心に議論しており、コンビニの移動販売の試験実施の総括と今後継続的に実施するかを検討するためアドバイスを求められたもの。コンビニ側の利益の問題がある一方、ニーズもあるため議論となったが、まずはモデル地域のサロン実施日に継続実施することとなった。

財団からは、今後の買い物支援の本格実施にあたっては、アンケート等でニーズ調査を実施し何に困っているかを把握した上で検討してほしいこと、また、移動販売は買い物に集まった人の集いの場にもなることから、それを利用して何かできないか考えるなど、

活動の組み合わせも考えてほしいことを伝えた。

23日／美里町松下地区で2回目の住民勉強会が開催され、当財団も協力。参加者27名。

今回は、助け合いが必要であること、自分たちでもできる助け合い活動があることに気づきを得てもらうため、「10年後を考えたときに不安に思うこと」「その課題を解決するために必要な活動」について話し合ってもらった。10年後については移動や買い物、孤立化に対する不安が大きく、必要な活動は移動販売や乗り合いタクシーでの買い物ツアー、サロン等だった。

次回は、すでに第2層協議体として活動している同町大沢地区から話をしてもらい、協議体の様子をリアルに感じてもらった上で協議体への参加の意思を確認する予定。（岡野）

大野市（福井県）

15日／大野市上庄地区協議体は、市内8圏域のうち6圏域目となる第2層協議体で、昨年9月から3回の住民勉強会（地域のささえあいを考える会）を実施し、手上げで協議体への参加を募り編成された。

今回は第1回目となる協議体の集まりで、これまでオンラインで協力していた当財団は初めての現地参加となり、協議体の具体的な取り組みについて再度整理を行った。参加者の協議により、今後は月1回のペースで開催していくこととなった。（高橋）

アドバイザー派遣事業に協力

滝沢市（岩手県）

6日／滝沢市の2層づくりを目的とした勉強会の1回目が行われ、岩手県のアドバイザー派遣事業で当財団が講師として協力した。2回の勉強会のうち、今回は生活支援体制整備事業の意義と助け合いの必要性を理解してもらうことが目的。

最初に同市職員から市の現状と制度説明等が行われ、続いて財団から事業の意義と多様な助け合い活動の事例を入れながら、「目指す地域像をみんなで考えるところから始めよう」と伝えた。講演の途中でアイスブレークも兼ねて助け合い体験ゲームを行い、助け合いの楽しさも実感してもらって進め、質疑応答も活発だった。終了後、2名の女性が「自分たちの地区で具体的な話し合いを始めていきたい」と言ってきた。担当行政やSCにつないで、気持ちが冷めないうちにバックアップしていこうと共有した。（鶴山）

韮崎市（山梨県）

10日／韮崎市の第1層協議体向け勉強会の事前打ち合わせがオンラインで行われ、山梨県のアドバイザー派遣事業として当財団も協力。勉強会の企画のため、現状や課題を共有した。

同市には昨年から情報提供し、情報交換しているが、住民主体を進めていくためにいろいろな検討を重ね、工夫している様子が伝わってくる。

目指す地域像を共有し、住民に働き

かける具体的な取り組みをしていくことで、住民主体の理解と協議体の役割の理解を一つずつ広げていこうと共有した。勉強会では、財団の講話、グループワーク等に加え、来年度の話を織り交ぜて今後につなげること、また、住民フォーラムについて周知し、協議体メンバーに運営に携わってもらうことなどについて話し合った。1月中旬以降に勉強会を実施する方向となり、財団としても引き続き支援していく。

（鶴山、三上）

笛吹市（山梨県）

1日／山梨県のアドバイザー派遣事業として、笛吹市への第2回の支援を実施した。参加者は、県担当者、同市第1層SC、第2層SC7名、協議体メンバー、市担当者、南アルプス市SCの斉藤節子氏と小林陽一氏、当財団の鶴山と三上。

鶴山から「助け合い創出　始めてみると何かが見える」として講義。第2層が地区ごとに多様な取り組みを始めているが、コロナ禍で動きが少なくなった地域もあった。例えば住民の声を聞く事例等を紹介し、工夫しながら具体的に動き出すことで、成果も課題も見えてくることを共有した。さらに、居場所や有償ボランティアなどの助け合い創出までの各プロセスにおける事例を紹介した。

意見交換では、各第2層協議体から活動状況や先進事例について発表し、それに対して鶴山、斉藤氏、小林氏から質問やコメントをして参加者の理解を深めてもらった。

参加者からは、「意見交換で勇気をもらえた」「今後もSCや住民の悩みに、事例を交えてアドバイスしてもらえる研修の機会が欲しい」との感想が聞かれ、今後の実践につながりそうな研修となった。引き続き支援していく。

（鶴山、三上）

多治見市（岐阜県）

13日／岐阜県のアドバイザー派遣事業による多治見市の支援に伴い、オンラインで同市の担当者、第1層・第2層SCと状況を確認した。

現状の課題等を整理しつつ、財団から他の自治体の事例を情報提供。今後の展開について検討した。今回の内容を踏まえ、引き続き今後の具体的な計画をまとめて実践につなげる予定。

（長瀬）

幸田町（愛知県）

21日／愛知県のアドバイザー派遣事業に伴い、幸田町の行政担当者、SCへのヒアリングを実施した。今後、生活支援体制整備事業を推進するために今年度内に関係者の意見交換を行い、来年度の計画をまとめる。

（長瀬）

東郷町（愛知県）

1日／愛知県のアドバイザー派遣事業により、東郷町の生活支援体制整備事業推進の取り組みに協力。今回は、年度内の協議体編成を想定した行政、包括、町社協の意見交換に参加。他の自治体の事例など情報提供とともに、今後の進め方について検討。今年度中

の勉強会開催に向けて準備を進める。

（長瀬）

西海市（長崎県）

15日／昨年10月にアドバイザー派遣事業で勉強会を支援した西海市の第1層協議体が開催され、当財団もオンラインで協力した。

西海市の第2層SCは配置されたばかりで、10月の勉強会では事業の意義や助け合いの効果、SCと協議体の役割等を共有した。その後、住民に働きかけて理解を広げようと、今年2月に中心地の西海地区でのミニフォーラム開催を計画している。

会議では、これまでの振り返りとして行政担当者と第1層SCから報告があり、財団からは、過疎高齢化や人口減少等の厳しい現状をミニフォーラムでしっかり共有し、助け合いが必要だと感じた人を掘り起こしていくことや、住民の声を聞くことの必要性を伝えた。また、「フォーラム開催についての意見」「何を伝えたいか」「参加対象」「プログラム・アイデア」「協議体の役割」についてグループワークで話し合い共有。各グループからミニフォーラム開催に賛成するとともに、いろいろな意見が出された。

財団から、出された素晴らしいアイデアをできるだけ計画に反映できるように、また、ミニフォーラムの参加者をその後どう生かすかも念頭に計画すること、やる気のある住民をしっかり生かしていくことの大切さを伝えた。また、助け合いを広げ、つながりを増やし広げていくこと、持っている力を生かし合うことで幸せを実感できる人たちが増えていくこともミニフォーラムで住民と共有していこうと伝えた。今後も支援していく。

（鶴山）

（本稿は、岡野貴代、髙橋望、鶴山芳子、三上宗佑、長瀬純治）

ご活用ください

いきがい・助け合いサミット in 神奈川『助け合い大全'21』

『提言・ポスター編』目次

提言編
- ●―神奈川サミット分科会の手引き―
  多様な課題にどんなヒントを提供したか
- ●全体シンポジウム　発言要旨
- ●分科会1～34

ポスター編
- ●「いいね！」上位20作品のご紹介

「いきがい・助け合いサミット in 神奈川」を振り返って

提言・ポスター編

パネル編

お申し込みは当財団まで

TEL（03）5470-7751

1セット2,000円（税込み）送料別途

※『パネル編』『提言・ポスター編』の2冊セットのみでの頒布となります。

ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナーは、本財団の趣旨にご賛同いただき、財政的・精神的にご支援くださる賛助会員の皆様です。会費は寄付金の一種として大切に活用させていただきます。新規ご入会の会員の方、会員をご継続いただきました皆様も毎号ご紹介いたします。また、個別のご寄付をいただきました皆様もご紹介させていただきます。

（敬称略）（2021年12月1日～12月31日財団受付分）※なお、自動振替の場合等、処理日と財団受付日にずれが出て掲載時期がずれる場合がありますことをご了承ください。

さわやかパートナー個人（67件）

（都道府県別50音順）

北海道
鍵政　弘子
加藤　聖治
金澤　勉
広山　麗子

岩手県
大久保　孝信
戸田　公明

福島県
ツノダ　ユミコ
矢吹　道徳

群馬県
市村　雅昭
高橋　恵理

埼玉県
佐藤　幸策
菅谷　雄一
田中　茂利
沼田　諭子
濱田　純一
平澤　やす子
平野　方紹
山田　礼子

千葉県
阿部　美佐子
石井　榮一
菊地　多鶴恵
北田　仁則
清水　勇男
田中　達夫
丹澤　明子
丹澤　泰夫
西原　清隆
山田　真幸
横地　泰公
姉崎　猛
大石　芳野
大泉　喜代子
鈴木　裕子
田所　裕二
谷本　憲一
辻村　哲夫
名執　雅子
藤田　庄子
山崎　威司
吉原　初江
匿名希望

神奈川県
太田　昭
古賀　啓子
妹尾　信二
高橋　秀和
福江　孝夫
箕輪　久美子
茂木　克美

山梨県
石田　義愛

長野県
古川　静男

愛知県
堤　孝雄

三重県
藤田　清正
三宅　修司

滋賀県
奥野　麻美子
坂井　元嗣

京都府
加地　保裕
小中　敬三

大阪府
髙橋　愛子
高橋　度
二井矢　道生
西井　久
播村　昭子

奈良県
藤　一男
湯川　基子

広島県
植木　茂

高知県
寺内　のりよし

福岡県
田中　三枝子

さわやかパートナー法人（4件）

（50音順）

株式会社エーシーエ設計
沖電気工業株式会社ＯＫＩ愛の募金事務局
医療法人ケイセイ会パークサイドクリニック
サントリービバレッジソリューション株式会社

一般ご寄付（13件）

（50音順）

川淵　三郎（30万円）
竹内　弘（1万円）
堤　孝雄（4万円）
平澤　やす子（1万円）
ほっこり倶楽部（6万6900円）
ボランティア・ベンダー協会（42万6706円）

松浦　正和（1万円）
松原　彰雄（2万円）
宮中37会（8千円）
米田　俊子（1万円）
匿名希望（100万円）
匿名希望（60万円）
匿名希望（1万7600円）

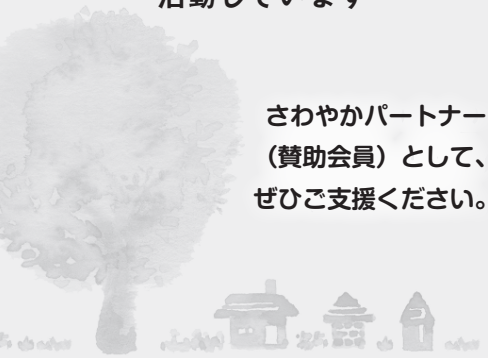
地域助け合い基金ご寄付（4件）

（ご寄付日付順）

渡辺　由美子（1636円）
日常生活支援あつべつ・たすけ愛ふくろう
代表　澤出　桃姫子（15万円）
匿名希望（5万円）
匿名希望（20万円）

私たちと一緒に、
誰もが安心して暮らせる
地域共生社会を
つくりませんか？

さわやか福祉財団は、
皆様のご支援によって
活動しています



さわやかパートナー
（賛助会員）として、
ぜひご支援ください。

個人会員、企業・団体等の法人会員ともに、
どなたでもお申し込みいただけます。
また、税制優遇措置もあります。

◎詳しくは、34ページをご参照ください。

職員訃報

故　苫米地　正章さん（85歳 没）

当財団で20年以上にわたり貢献された苫米地正章さんが、1月3日にお亡くなりになりました。苫米地さんは、大手商社で活躍し退職された後、1998年からボランティアスタッフとして財務グループ、グループホーム推進グループ、組織づくり支援事業、地域ネットワークづくり推進事業、社会参加推進事業など、時代ごとに当財団が注力した事業に関わり、精力的に活動していただきました。

また、得意の写真撮影の技術を生かして、当財団の主要な行事での撮影記録を残していただいており、当財団にとって貴重な記録財産となっています。

謹んでご冥福をお祈り申し上げますとともに、これまで故人にお寄せいただきましたご支援に心より御礼申し上げます。

みんなの広場

投稿募集

『さぁ、言おう』は皆様の声を
社会につなげる問題提起型情報誌です。
ぜひ皆様の声をお寄せください。

送付先
〒105-0011 東京都港区芝公園2-6-8 日本女子会館７階
公益財団法人さわやか福祉財団
『さぁ、言おう』編集部宛
FAX：(03) 5470-7755 E-mail：pr@sawayakazaidan.or.jp

一人でも多くの人が幸せに

平澤 やす子さん 80歳 埼玉県

さわやか福祉財団30周年おめでとうございます。携わってこられた皆様方に、ただただ感謝です。

一日の終わり、暖かな布団に入ったとき、この寒空の下、凍えている方がいらっしゃる、でも何もできない自分を思いながら、一人でも多くの人が幸せでありますようにと願う毎日です。私にできることは、生協、町内会、そして地域の支え合い協議会を通してのわずかな会費、寄付くらいです。

コロナ禍、どうぞ皆様ご自愛の上、ご活躍くださいますようお願い申し上げます。

あなたの暖かいお気持ちが、多くの幸せをつくり出します

25年前、寄付の第1号は…

近藤 豊彦さん 80歳 愛知県

病により第一線での勤務は難しいとの診断を受け、定年をかなり残して故郷に戻った。そんなとき、時間預託のボランティアを立ち上げるお誘いを受けた。準備も進み、いざ設立総会となり、無謀にも堀田会長の事務所に団体立ち上げの思いを書いて送り、基調講演をお願いした。私と家内のわずかの講演料も用意した。

当日講演料をお渡しすると、「立ち上げの費用にしてください」と、第1号の寄付として堀田会長からいただいた。

25年前の、感動の思い出です。ありがとうございました。

近藤さん、覚えています

Tsutomu Hotta

私たちはふれあいあふれた地域づくりを支援しています

さわやか福祉財団の活動をぜひご支援ください。

『さぁ、言おう』はみんなで新しい社会のあり方を考える問題提起型の情報誌です

■さわやか福祉財団の活動をさわやかパートナーとしてご支援ください。

『さぁ、言おう』を毎月お手元にお届けいたします。
さわやかパートナーは、さわやか福祉財団の理念と活動に共感して会員としてご支援いただく賛助協力者の皆さんです。

個人年会費	Aコース	10,000円
	Bコース	3,000円
法人年会費（1口）	Aコース	100,000円
	Bコース	20,000円

公益財団法人さわやか福祉財団の会費は、特別な特典を付与するものではない賛助会費であり、寄付金の一つの形です。

■寄付金は税金の控除対象となります。
さわやか福祉財団へのご寄付は、所得税、法人税等の控除対象となります（所得税の寄付控除額の上限は所得の40%－2000円）。

一般ご寄付をいただく場合のお振込口座

口座名義：公益財団法人さわやか福祉財団
郵便払込　００１２０-９-６６８８５６※
三菱ＵＦＪ銀行　浜松町支店　普通預金　口座番号３７３１７１４
りそな銀行　芝支店　普通預金　口座番号１１７４２９７

※手数料不要の郵便払込取扱票をご用意していますのでお申し出いただければご郵送します。

＊いずれもお問い合わせは、編集部あるいは社会支援促進チームまでお気軽にご連絡ください。（mail@sawayakazaidan.or.jp）

表紙絵から　はり絵・池田げんえい

「けやき坂の小鬼」

編集後記●コロナ禍のエッセンシャルワーク、ＡＩが進む社会と助け合いについて、理事長が巻頭言で書きました（Ｐ２～）。●「挑む！　我らの地域づくり」は大阪市東成区。区民と一緒に助け合いづくりを進める第１層生活支援コーディネーター島岡さんの思いと、活動会員、利用会員の方々を取材しました（Ｐ４～）。●「活動の現場から」は山梨県甲斐市敷島台。体制整備から助け合いが創出されました（Ｐ９～）。●時代が変わっても、人は、人との出会いによってつくられます（Ｐ20～「老いの暮らしを創る」）。

助け合いを
広げよう！

新 ひとりごと

清水　肇子

自分のためなら面倒なことでも
人のためだからこそ自然に体が動くこともある
自分だけでは踏み出せなかったことも
誰かに背中を押してもらってできることがある
そんな不思議な力を与えてくれる人と人とのふれあいは
どんなに時代が進んでも、やっぱりみんなで大切にしたい

公益財団法人さわやか福祉財団理事長
朝、子どもを保育園に預ける若いパパを多く見かけるようになりました。地域の人々も自然に子どもと交流できる環境づくりをもっと進めていきたいものです。

さわやかお 2月号

通巻342号　2022年2月10日発行
（毎月1回10日発行）
表紙絵　池田げんえい
イラスト　すずきひさこ
レイアウト　菊池ゆかり
印刷所　日本印刷株式会社

発行人　清水肇子
発行元　公益財団法人さわやか福祉財団
〒105-0011
東京都港区芝公園2-6-8 日本女子会館7階
Tel (03)5470-7751　Fax (03)5470-7755
E-mail pr@sawayakazaidan.or.jp
https://www.sawayakazaidan.or.jp
Printed in Japan

無断複写・無断転載はご遠慮ください©

さあ言おう 2月号
令和4年2月10日発行
（毎月1回10日発行）
通巻342号
発行人 清水肇子
発行元 公益財団法人さわやか福祉財団
〒105-0011
東京都港区芝公園2-6-8
日本女子会館7階

「地域助け合い基金」で
コロナ禍を乗り越えて共生社会へ

皆様からのご寄付をお待ちしています

1. 寄付金の使途

共生社会を推進するため、助け合い活動の支援に活用させていただきます。

助成の対象は、地域で暮らす人同士の助け合い活動であり、新たに団体を設立する場合のほか、新たに活動を広げる場合やコロナ禍に対応して特別な助け合い活動を行う場合も含みます。

高齢者、子ども、認知症、障がい、生活困窮の方々、刑余者、外国人、ケアラーの支援ほか、分野は問いません。ただし、日本国内の活動に限ります。

本基金は、支援したい市区町村（区は東京都の特別区）をご指定いただけます。

2. 税制上の優遇措置

当財団にいただいたご寄付は、税制上の優遇措置の対象となります（当財団発行の領収証が必要となります）。

3. ご寄付の方法

（1）銀行振込によるご寄付

三井住友銀行　浜松町支店　（普通）　口座番号　7859452
三菱ＵＦＪ銀行　浜松町支店　（普通）　口座番号　0095446
（口座名義 ※いずれも同様）
公益財団法人さわやか福祉財団　地域助け合い基金

※銀行お振り込みの場合は、送金者の情報がカタカナ表記のお名前のみとなるため、当財団発行の領収書が必要な場合や地域の指定をご希望の場合は、お手数ですが「寄付申込書」を当財団宛お送りください。当財団へのお電話でも承ります。

（2）郵便振替によるご寄付

（口座記号番号）　00110－7－709627
（加　入　者　名）　公益財団法人さわやか福祉財団

※通信欄に、ご指定がある場合の市区町村名（区は東京都の特別区）と、ひと言応援コメントなどをご記入ください。また、手数料不要の払込取扱票をご用意していますので、お申し出いただければ郵送いたします。

（3）クレジットカードによるご寄付

19ページのＱＲコードもしくは当財団ホームページよりお申し込み下さい。

助成応募については、当財団ホームページをご参照ください。
「寄付申込書」「パンフレット」なども、ホームページからダウンロードできます。

＜寄付・助成のお問合せ＞
地域助け合い基金担当
電話：(03)5470-7751　FAX：(03)5470-7755
メール：tasukeai-kikin@sawayakazaidan.or.jp